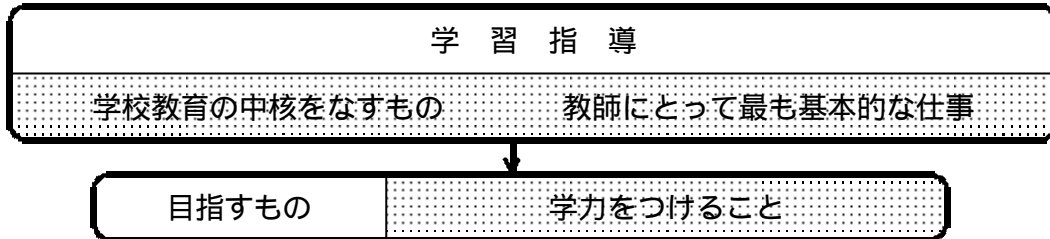


本稿は、初任者研修のテキストの中の「学習指導」の項の一部であり、あくまでも、義務教育課として各学校の参考に供したいとの意図から作成したものです。

学 習 指 導

1 学習指導の目指すもの



学力を3つのレベルに分けて考える

平成14年度から実施される新教育課程では、多くの知識を一方向的に教え込むことになりがちであった教育の基調を転換し、厳選された基礎・基本を確実に身に付けるとともに、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの生きる力を身に付けることを基本的なねらいとしている。また、自ら学び自ら考える力の基盤としての基礎学力については、繰り返し学習させるなどして、確実に習得させることが求められている。

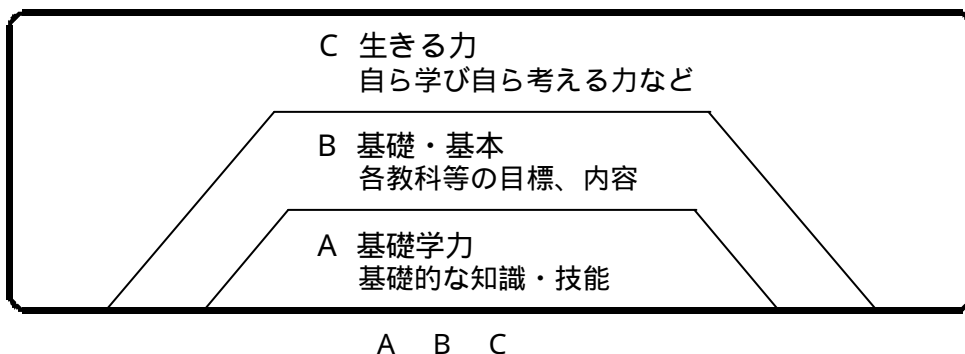
このように、基礎・基本、生きる力、基礎学力が、これからの学校に求められている学力といえる。しかし、これら3つの学力については、必ずしも意味規定や相互関係が明らかにされないまま使われている傾向がある。そのため、児童生徒にどのような学力がついたのかが曖昧になったり、学力向上のための議論が空回りしたりすることも多い。

とりわけ、総じて、全国水準に至っていない当県小・中学生の学力状況を改善するためには、まず、一番の基礎の部分である基礎的な知識、技能を確実に身に付けることを徹底しなければならない。そして、これだけ頑張った、これだけできるようになったということを具体的に目に見える形で示し、実感させ、一人一人の児童生徒にやればできるという自信をもたせて、その後の学習に意欲をもって取り組むことができるようにしなければならない。

そのために、学力を下図のように3つのレベルに分けて、その意味と相互関係を整理し、各学校の参考に供したいと考えた。

これを参考に、今後、各学校で、どのような学力をつけようとしているのかを具体的に明らかにした上で、方法を探り、効果を客観的なデータで点検しながら学力向上に取り組んでほしい。

学力の構造



A 基礎学力

基礎学力とは、何かを学ぼうとしたときに、その学習を可能にする基礎となる力のことであり、具体的には、次の2点を考えておく必要がある。

読み、書き、計算に代表される、すべての学習を成立させる上で必須の基礎的な知識・技能
話す・聞く、書く、読む、計算、図表やグラフの読み方や活用の能力、情報探索の能力など
各教科における独自の基礎的な知識・技能

例えば、社会科では、都道府県の位置と名称、地図の方位や縮尺、等高線を読む力、雨温図を読む力、時代を代表する歴史上の人物名など

このような基礎的な知識・技能は、次に挙げるB、Cの学力の基盤となるものである。

学習指導においては、個々の児童生徒の基礎学力の習得状況を的確に把握し、各学年の修了段階や各学校の卒業段階までには、その学年、その学校で身に付けるべき基礎学力は確実に習得して次の段階へ進むことができるよう、学校を挙げて取り組む必要がある。このことは、学校教育の不易の役割であり、今後も変わるものではない。

基礎学力は、理解や納得を抜きにして、ただ単に教え込めばよいというものではなく、あくまでも理解が伴ってはじめて生きて働く知識となる。また、基礎学力は、いつでも必要なときに使えるようになっていなければならない。そのためには、一度の指導でよしとするのではなく、しっかりと記憶され、確実に習得されるように、反復練習して身に付けさせる必要がある。また、具体的な場面で、新たな問題の解決のために使いこなすことによって、はじめに理解したことよりも、一層理解が深まり、まとまりのある知識の枠組みの中に位置付けていくのである。

このように、基礎学力は、「理解する 習得する 適用する 理解がより深まる」というような一連のサイクルの中に位置付けて考えていく必要がある。

B 基礎・基本

基礎・基本とは、学習指導要領の各教科等の目標、内容として定められたもの全体を一言で表現したものである。「基礎的・基本的な内容」という場合も、同じ意味である。基礎・基本の要素をあげれば、次の4項目になる。

関心・意欲・態度 思考・判断 表現・技能 知識・理解

このことから分かるように、基礎・基本とは、読み、書き、計算などの基礎的な知識・技能のみにとどまるものでなく、主体的に学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力なども含んでいる。

学習指導要領に示されている内容は、教科等によっても異なるが、多くの場合、結果として身に付けさせるべき知識・理解の内容となっている。しかし、基礎・基本は、それだけでなく、～の資質・能力も含むものであるから、学習の対象に深く関心を寄せたり、自ら学ぶ意欲をもったりすることや、思考力等の能力を駆使して、それらの能力をより一層高め、その過程や結果において、理解が深まり、理解に裏付けられた生きて働く知識として獲得され、定着していくのである。

このように考えると、基礎・基本を確実に身に付けるには、その習得過程を重視しなければならないことが分かる。すなわち、基礎・基本を重視するということは、たくさんの知識を一方向的に詰め込んで

暗記する学習とは、一線を画すということである。児童生徒が、作業的・体験的な活動や問題解決的な学習、自分の興味・関心等に応じた学習などにじっくりと取り組み、学ぶ楽しさや成就感を体得しながら、実感をもって理解していくことによって学んだ内容が、基礎・基本となりうるのである。

各教科等で身に付ける基礎・基本は、学力の中核であり、基礎・基本こそ、次に述べる「生きる力」にとって不可欠のものである。学習指導の中心的役割は、この基礎・基本を確実に児童生徒一人一人のものとして習得されるようにすることであり、教師は、このことに全力をあげて取り組まなければならない。

C 生きる力

これからの社会は、変化が激しく、先行き不透明な社会になると予想されている。このような社会を生きていく児童生徒には、次にあげる資質・能力が必要となっている。これが「生きる力」である。

自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力（知）

自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、感動する心など、豊かな人間性（徳）

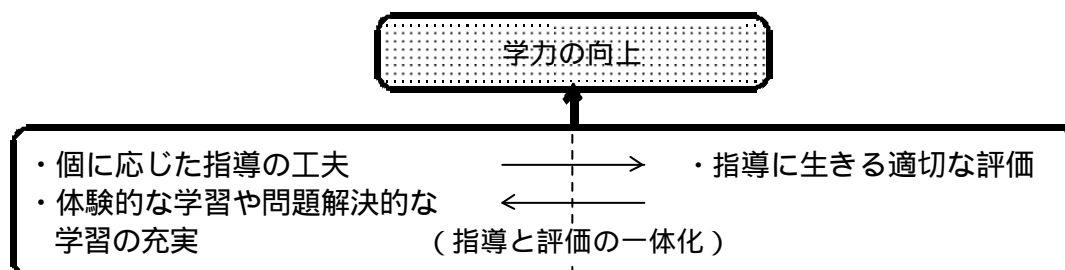
たくましく生きるための健康や体力（体）

こうした「生きる力」は、学校だけで育成されるものではなく、家庭や地域社会における様々な生活や体験を通して深められ、根付くものであるが、学校教育においても、「生きる力」をはぐくむことを基本的なねらいとしてすべての教育実践を展開していく必要がある。

とりわけ、学力を考えるときには、の「知」にかかわる内容を学力の主体と考えて、その育成を図る必要がある。したがって、学習指導においては、学習指導要領に示された基礎・基本を身に付けることはもとより、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成することを考えて、教育実践に当たらなくてはならない。

また、「生きる力」の育成を直接的なねらいとしている「総合的な学習の時間」においては、各教科で身に付けた知識や技能を相互に関連付け、総合的に働くようにする「知の総合化」ができるように指導していくことがとりわけ重要になる。

2 学習指導の基本的構え



(1) 個に応じた指導の工夫

各教科等の指導に当たっては、児童生徒が学習内容を確実に身に付けることができるよう、学校や

児童生徒の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、教師の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ることが大切である。また、学習内容の習熟の程度に応じた指導を取り入れることも大切である。

児童生徒は、それぞれ能力、適性、興味・関心、性格等において様々な特性を持っており、それぞれの児童・生徒に応じた適切な指導方法を工夫していくことが必要である。それによって、児童生徒一人一人が基礎・基本を確実に身に付け、その後の学習や生活に生かすことができるようになるとともに、自分自身のものの見方や考え方をもち、個性を一層伸長していくことになるのである。

このように、個に応じた指導には、大きく分けると二つの意味がある。一つは、一人一人の違いに応じた手立てを尽くすことによって、すべての児童生徒に同一の内容を獲得させるための指導である。もう一つは、一人一人の児童生徒の個性を生かし、それを伸ばしていくための指導である。前者を求同、後者を求異と言うことができる。

個に応じた指導といっても、すべての学習を個別化して行うわけではない。日常の授業はほとんどの場合、学習集団の中で、児童生徒相互、あるいは教師と児童生徒がかかわりあいながら学習を進めていくものであり、全員で同一の課題を考え合ったり、いくつかの解決方法を全員で比較検討する等々、集団で学習を行うのが授業の基本的なスタイルである。したがって、教師はまず、集団を対象としての授業の力量を磨かなければならない。

あらゆる学習の基礎となる「基礎学力」については、一斉指導の中ですべての児童生徒に確実に身に付けさせるよう努力しなければならない。ただし、一斉指導の過程において、例えば単純な計算の学習であっても、具体物を繰り返し使ってじっくり理解していく児童もいれば、数の念頭操作が得意な児童もいるので、個々の児童生徒の分かり方の違いに着目し、その違いに応じて指導方法を工夫する必要がある。また指導の過程や結果において、個々の児童生徒の理解や定着の状況を見定め、不十分な面が見られたら、その場で補充してやるか、あるいは放課後等に時間を設定し補充指導を行うことも必要である。このような指導方法は、個に応じた指導の最も基本的な手法として随時取り入れていくことが大切である。

「基礎・基本」の定着を図る指導においては、導入は一斉指導であっても、その後の課題追究は、興味・関心別、理解・習熟の程度別、追究方法別など、児童生徒の実態や指導目標・内容に応じて、多様なグループを編成して指導に当たる必要もある。その際、グループ別に学習している内容を適宜全体の場に持ち込んで、全員で討議したり、逆に、全員で討議した内容をさらにグループ別に詳しく調べるなど、全体学習とグループ学習の組み合わせ方も工夫する必要がある。また、グループ学習の進め方について、児童生徒に身に付けさせておく必要もある。

「生きる力」の育成のためには、基礎・基本の習得過程においても、常に、自ら学ぶ姿勢や自ら考えるための学び方や調べ方なども身に付けさせておく必要がある。また、年間指導計画の中に、児童生徒自らが課題を設定し、自分の力で調べたりまとめたりする学習も適宜用意しておく必要がある。その場合、個々の児童生徒が自らの個性、能力、適性に応じて課題を設定するとともに、教師の指導のありようも、それに依って濃淡をつけるなど、あくまでも個々の児童生徒に即した学習指導を行っていくことが重要となる。

なお、個に応じた指導方法としては次のようなものがある。

個別指導、グループ別指導、理解の状況に応じた繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた

指導

また、個に応じた指導体制としては、次のようなものがある。

チームティーチング、少人数指導、合同授業、交換授業、学校外の専門家の参加・協力、他の学校との連携・協力

(2) 体験的な学習と問題解決的な学習の充実

各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や問題解決的な学習を重視するとともに、児童生徒の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫することが大切である。

生きる力を育成するには、学習指導において、児童生徒に、知的好奇心や探究心、論理的に考える力、情報を主体的に選択し判断する力、自分の考えを的確に表現する力などの能力を培う必要がある。そのためには、体験的な学習や問題解決的な学習を充実しなければならない。

このため、小学校においては、例えば国語科ではスピーチや話し合い、社会科では事例を選択した問題解決的な学習、算数科では作業的・体験的な活動など算数的活動、理科では見通しをもった観察・実験やものづくりを通じた学習などを充実することが重要である。また、中学校においては、例えば国語科では説明や討論、社会科では学び方を学ぶ学習、数学科では数学的活動や課題学習、理科では目的意識をもった観察・実験や探究的活動などを重視した学習を充実することが重要である。

こうした学習を通すことによって、各教科等において習得すべき内容を、児童生徒は実感をもって理解し、一人一人のその後の学習や生活において生きて働く確かな基礎・基本となるのである。

したがって、各教科等の指導に当たっては、教材、指導形態、1単位時間や授業時数の運用などに創意工夫を加え、体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れることが重要である。

さらに、「総合的な学習の時間」においても、自然体験や社会体験、観察や実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動などの体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れることが重要である。

ただ、ここで気を付けなければならないのは、体験的な学習や問題解決的な学習が、ともすると一部の児童生徒の主導によって展開されたり、学習内容が表面的で深まっていなかったりして、一人一人の児童生徒に基礎・基本が身につけていない状況に陥ることがあるという点である。したがって、体験的な学習や問題解決的な学習の展開過程において、常に、個々の児童生徒の学習状況を評価し、必要な手立てを加えることができるよう準備しておくことが大切となる。また、時には、状況に応じて、教えるべき事項はきちんと教えるという構えを教師が持って臨むことも重要となる。

(3) 指導に生きる適切な評価

評価の機能と役割は、「各学年、各学校段階等の教育目標を実現するための教育の実践に役立つようにすること」「児童生徒のよさや可能性を評価し、豊かな自己実現に役立つようにすること」の2つである。つまり、評価とは、児童生徒のための評価であると同時に、学校や教員が進める教育自体の評価であるとも言える。こうしたことから、指導と評価は表裏一体をなすものであり、学習指導においては、指導と評価が常に一体となっていくことが求められる。

これからの評価は、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を見る評価（いわゆる絶対評価）を一層重視し、観点別学習状況の評価を基本として評価していくことが重要となる。また、自ら

学ぶ意欲や問題解決の能力、個性の伸長などに資するよう、個人内評価（児童生徒ごとのよい点や可能性、進歩の状況などの評価）を工夫することも大切である。

A 基礎学力の評価

「基礎学力」の評価に当たっては、明確な到達基準を設定し、すべての児童生徒に確実に身に付いたかどうかを評価する必要がある。そして、不十分な場合には、個別に補充指導等を行い、到達基準に達せさせる必要がある。（形成的評価）また、新しい単元等に入る前には、その単元等の学習に必要な基礎学力が確実に定着しているかどうかを確かめ、不十分な場合には、同様に補充指導が必要である。（診断的評価）さらに、学期末や学年末には定期的なテスト等によって評価し、やはり不十分な場合には補充指導を行い、その学年で身に付けるべき基礎学力は確実に習得させた上で次の学年へ送るようにすることがとりわけ重要になっている。（総括的評価）なお、補充指導を行うに当たっては、学年体制、学校体制で役割分担したり、指導時間を特設したりするなど、学校全体で取り組むことも大切である。いずれにしろ、すべての児童生徒が基礎学力を身に付けたことを自覚し、やればできるという自信を持って次の学習に立ち向かうことができるようにすることが何よりも重要となる。学習には、意欲と自信が必要である。

B 基礎・基本の評価

「基礎・基本」の評価は、前述した4つの要素を観点にして評価基準を設定し、いわゆる絶対評価を行うことになる。評価基準とは、学習指導要領の目標の達成度や実現度をみるための拠り所のことである。具体的には、単元や題材ごとに評価基準を設定して、評価することになる。

評価の仕方は、4つの観点で異なることになる。

「知識・理解」の評価は、達成度をみることになる。これは、前述した基礎学力の評価とほぼ同様であり、ペーパーテスト等を用いて、計量的に評価することができる。しかし、「知識・理解」といっても、基礎的な知識から、深い理解を伴った知識もあるので、テスト問題を工夫して、理解の程度を見ることができるようにならなければならない。また、ペーパーテストにだけ頼るのではなく、発言やノート、レポート等も重視しなければならない。

「関心・意欲・態度」の評価は、実現度をみることになる。あらかじめ評価基準として設定した最適な姿をどの程度実現しているかを見るので、ペーパーテストはなじまず、日常の観察やノート、レポート等から判断することになる。関心・意欲・態度の評価は、授業中の挙手や発言回数などといった表面的な現れだけではなく、教科の学習内容や学習対象に対する関心や進んでそれを調べようする意欲、学んだことを次に生かそうとする主体的な態度などを評価することが重要である。

「表現・技能」と「思考・判断」の評価は、上述した2つの評価の仕方のどちらかに傾斜して行うことになる。どちらに傾斜づけるかは、単元等の具体的な目標・内容によって決まることになる。例えば、「思考・判断」は、テスト問題を工夫することで、かなりの程度、計量的に評価することは可能である。しかし、ペーパーテストだけでは限界があるので、ここでも、発言やノート、レポート等も重視しなければならない。

基礎・基本の評価に当たっても、基本的には、基礎学力と同様、前述の形成的評価、診断的評価、総括的評価を重視しなければならない。

各観点の評価の尺度は、「A十分満足」「Bおおむね満足」「C努力を要する」となっているが、その

考え方も、4つの観点すべて同じでなくてよいと考えられる。「知識・理解」については、基礎学力とほぼ同様の考え方ですべての児童生徒に確実な習得を求めたい(求同)。そのほかの観点についても、すべての児童生徒が「Bおおむね満足」を超えることを目指すべきであるが、この場合、基礎学力と違って、すべての児童生徒がすべての観点について、完全な習得が必要というものではない。ある教科のある観点は「A十分満足」であるが、ある教科のある観点は「Bおおむね満足」であることもありうるし、それを、その子の持ち味として認める方が、むしろ児童生徒の個性を尊重していくことになる。(求異)

C 生きる力の評価

「生きる力」の評価は、各教科においては、基礎・基本の評価の中に多くの部分が含まれていると考えるべきであろう。各観点の内容は、各教科で具体化した「生きる力」の内容ということもできるからである。しかし、各教科別に評価するだけにとどまらず、トータルとして、その子どもに、その子らしい「生きる力」がどのように育ってきているかを評価していく必要もある。この点についての評価は、個人内評価を中心にして、その子なりの成長を把握していくことが必要である。また、児童生徒の自己評価や相互評価なども適宜活用して、児童生徒自身が自分の成長を確認できるようにしていくことも大切である。

特に、総合的な学習の時間の評価については、各学校が、総合的な学習の時間の具体的な目標と内容を定め、それを実現するための評価の観点を各学校の考え方の下で設定して、その観点にしたがって、個々の児童生徒の生きる力がどのように育っているかを評価することが大切となる。